

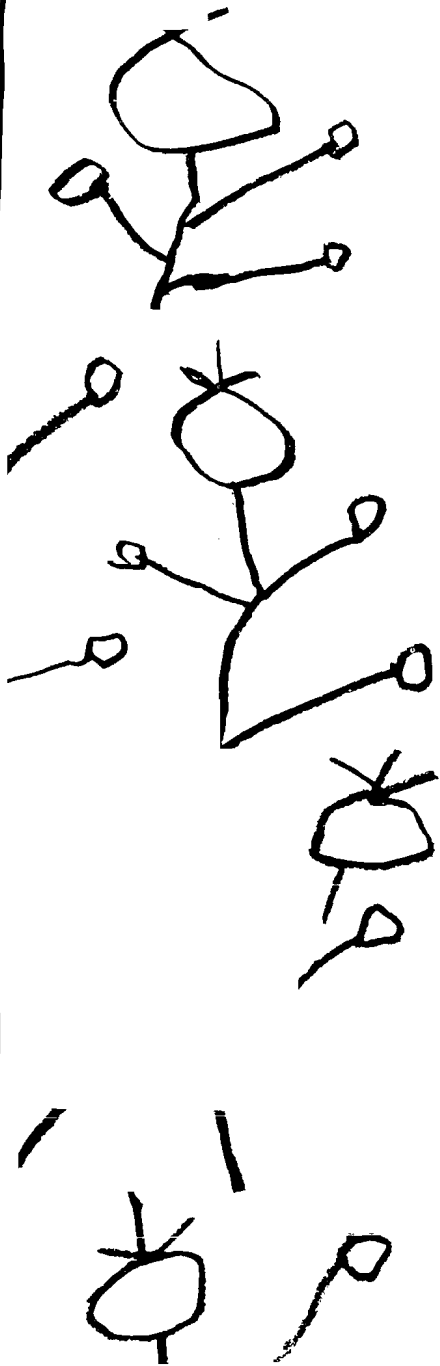
小島直記伝記文学全集

島直記

記文集全集

第八卷

中央公論社



小島直記伝記文学全集

第八卷

定価 三八〇〇円

昭和六十二年五月十日印刷
昭和六十二年五月二十日発行

著 者 小島直記

発行者 嶋中鵬二

印刷者 小林 清

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替 東京二一三四
© 一九八七 検印廃止
ISBN4-12-402588-2

小島直記伝記文学全集

第八卷

目次

東京海上ロンドン支店

第一章 予測と中的の間

——東京海上火災と高島易断——

9

第二章 殿様たちの会社

——「東京海上保険会社」の創立——

50

第三章 からみ合う利害

——筆頭株主・岩崎弥太郎——

91

第四章 忍び寄る危機

——各務鎌吉の登場——

133

第五章 老いたる麒麟

——莊田平五郎と益田克徳——

163

第六章 第二の新人

——平生鈆三郎の登場——

193

第七章 仕事の虫たち

——ロンドンの各務、東京の平生——

233

第八章 見えない部分

——統率者の決断の条件——

273

第九章 濡米^{ぬれまい}処分

——平生鈆三郎の戦い——

304

第十章 大阪支店長

——益田の辞任と平生の関西進出——

336

第十一章 ロンドンの明暗

——各務と平生の再会——

375

第十二章 突きつけた切り札

——二人が会社の実権を握る——

397

第十三章 破局への予兆

——相つぐ私生活の不幸——

439

第十四章 攻撃そして反撃

——ついに全面衝突へ——

470

第十五章 やめたい理由

——友情と辞意のはざまで——

501

第十六章 兼業専務

——関西、政界、言論界へ野心——

533

第十七章 忠告そして警告

——微妙に保たれる二人の関係——

564

第十八章 運命の旅

——四〇年の交友の意味は——

595

あとがき

637

小島直記伝記文学全集

第八卷

東京海上ロンドン支店

東京海上ロンドン支店

第一章 予測と的中の間

——東京海上火災と高島易断——

一

科学万能、合理主義謳歌の時代——といいながら、一方では、手相、姓名、星などによる運命判断がさかんだ。

夜の銀座には、たくさんの易者が出る。

新宿では、真昼間、伊勢丹のあたりから紀伊國屋書店きのくにやの近くまで、長い行列ができているのを目撃した。

「特売でもあるんですか？」

ときくと、そうではなかった。

そのあたりに、よくあたるといふ女性占い師が店を出している。

そのひとに運命判断をしてもらおうと、長蛇の列ができているのだそうだ。

この物語は、占いのことを書くものではない。東京海上火災という会社を再建させた男たちのドラマが主題である。

日本の会社の中の超一流優良企業。

社員に対する待遇が最高に良く、学生間の人気ナンバー・ワン。

その会社のドラマを語るのに、なぜ占いの話など、はじめにもってきたか。

それは他でもない。この会社の生誕そのものが、いわゆる「あたるも八卦、あたらぬも八卦」の高島易断に關係があるからなのだ。

東京海上火災と高島易断。

「まさか……」

とおもわれる方もあろう。

だが筆者は、決してデタラメをいっているのではないのだ。

明治五年、といえば、もはや一〇八年も昔のことになるが、その年五月、

「東京ヨリ青森マデ鉄道建言書」

というものを政府にさしだしたものがいた。

東京から青森まで、どうやって鉄道を建設するか、その資金作成のことなど方策をのべて、

「その工事を私に請負わせていただけませんか」

と願ひ出たのである——と書くと、なんの変哲もないようだが、じつは大変なことだったのだ。

日本ではじめての鉄道——新橋—横浜間二八・八キロの工事が、総工費三七二万円で落成するのは、この建言書提出の四カ月後である。

この鉄道は、明治二年十一月、政府で決定し、三年三月、東京（芝口）、横浜（野毛浦）の両方から工事に着手した。

そして五年五月十二日に開業式をおこない、翌十三日、汐留（しおどめ）—横浜間に旅客列車が開通、同月

二十七日に汐留停車場を新橋停車場と改称し、同年九月に工事全体が落成したのであった。

すなわち、工事の当事者は「政府」である。

工事費は、地租を主とする国家資金が大部分で、これにイギリスで募集した公債金の三分の一を加えた。

そして、技術者はイギリス人をやとい、また機関車、客車、レールなど、すべての資材もイギリスから輸入している。

一般の日本人は、その技術どころか、汽車そのものを知らない、という未開の時代なのだ。

そういう時代に、いわば一介の民間人が、新橋―横浜間どころか、

「東京から青森までの鉄道をつくりましょう」

と申し出たのであるから、これはもはや、大胆不敵というよりは、途方もない大ボラを吹いてみせた、といったほうがいいだろう。

この男こそ、高島嘉右衛門^{かえもん}。

「吞象^{どんしょう}」という雅号をもち、「高島易断」(明治十五年着稿)という本も書きたいわゆる「高島易断」の開祖にはかならない。

易は、碁や将棋や麻雀^{マージャン}とおなじように、その家元は中国である。

その古い時代の、むずかしい理屈や占いの方法はともかくとして、日本では一八世紀―五代將軍徳川綱吉の元禄の時代から、一代將軍家齊^{いえはら}の寛政時代―のころから、

「易の原典(易経)についての解釈がおこった」ときいている。

占いを職業とする易者も、その時代にひじょうに多くなつた。その数ざつと一〇〇〇人。辻や往来で營業する売卜先生、別名大道易者は一町一人くらいであつたという。

高島嘉右衛門というひとは、その江戸時代、天保三年（一八三二）の生まれだが、生家は易者でなく、江戸三十間堀に店をもつ材木屋だつた。

そして本人も、天眼鏡、筮竹などの道具をもつて、大道で人を占つたことはない。

そういう人物が、一方では「高島易断」の開祖となつた。また他方では、北海道炭礦鉄道の二代目社長にもなつてゐる。

北海道炭礦鉄道（もとは「礦」のかわりに「鑛」をつかつた）——この会社は、鉄道部門を政府に買収されてからは、北海道炭礦汽船となつた。略して「北炭」、ついこの間上場廃止がきまつたが、明治時代においては日本を代表するビッグ・ビジネス。

明治維新まで蝦夷地といつていた北海道を開発する役目をもつたのは、明治二年に設置された「北海道開拓使」という役所である。

これは十五年に廃止され、十六年に北海道事業管理局を設け、さらに十九年一月、内閣直屬の「北海道庁」を設けた。

北海道庁は、開拓事業の直營をやめ、民間企業にこれをやらせることとした。そのチャンピオンとなつたのが「北炭」だ。

この会社の初代社長は、堀基といつた。薩摩藩士出身で、黒田清隆の腹心として開拓使につとめ、屯田兵の育成などをやつて、北海道理事官をもつて退官。

政府から、幌内炭山と付屬運炭鉄道の払い下げをうけ、資本金六五〇万円をもつて「北炭」を創立した。

これが明治二十一年十一月、堀は四五歳だった。

内閣は、堀の親分黒田清隆が第二代総理大臣となっていた。払い下げ関係がうまくいったばかりでなく、政府は出資者に対して年五分の利息保証をした。

株主は、会社がもうからなくても、出資金に年五分の利息がつく。安全この上もないことだ。一方、皇室においても、産業奨励という大目的から、この会社の株保有が決められた。

こういう例としては、日本郵船、日本鉄道、第十五銀行がある。要するに「北炭」は、そのスタートのときにおいてすでに「一流」のマークをおされたようなものだった。

二

ところで、社長の堀をはじめ、社内の幹部級はほとんど鹿児島県人で占められ、社内の談話も鹿児島弁でなければハバがきかぬという状態——そこにおのずと情実関係も生じてきた。つまり地位の上下、昇進は、かならずしも本人の能力、手腕に比例しなかった。

おまけに、会社業務は、炭礦の経営と、鉄道の経営との二部門にわかれている。その間の統制がうまくいかず、能率は落ちる一方だった。

その上、日本の資本主義自体が未成熟——生産工場の数が少なく、石炭が多く掘れたとしても、そのマーケットはせまい。そのせまいマーケットに九州炭が有力なライバルとなっていた。

そのうち、明治政府を独占した藩閥のうち、薩摩派のライバルである長州派が、北海道利権の独占をねたみ、反感、敵意をもった。

会社がうまくいかないのを見ると、

「それみたことか」

とはやし立て、公然と非難しはじめる。

「北海の魔窟」

というような悪評さえ、世間にはひろまった。

こうなると、詰腹を切らされるのは、社長の堀ということになる。

本人は無論いやがったが、周囲がやかましくいい立てて、ついに半強制的に退陣させてしまった。

そのあと、ピンチ・ヒッターとして起用されたのが長州派と密着していた高島嘉右衛門だ。

「堀は士魂士才、実業経営には不向きだったが、今度の社長は士魂商才、大いに刷新の実をあげるにちがいない」

大変な期待のもとに就任した。

ところが、「北炭」社長としての業績については、評価が真二つにわかれている。

大正三年に刊行された『吞象高島嘉右衛門伝』によれば、それはすばらしいものだった。

たとえば明治二十六年、石炭の売れゆきがわるく、現場には滞貨の山ができた。そこで総支配人の技師長が心配して、

「今後の方針は、いかがいたしましょうか」とたずねたのである。

すると高島社長、おもむろに筵竹をとり、いわゆる「易断」を試みた。そして、

「この卦面にあらわれたところによれば、近年のうちに大事件発生、となっている。そして石炭の需要はひじょうに増加するはずであるから、決して採掘を手びかえするにはおよばない。今までの作業を継続させよ」